

いこっとサポットの会と振り返る

特集

「ぱれっとの家 いこっと」の

座談会

15年
～後編～

【参加者】 谷口奈保子/相馬宏昭/稲澤憲/高取正樹/
田口雄一/カンナル/松村昂明/黒澤友貴/

（進行：南山達郎）

●変化

南山：いこっとが出来て6年目ぐらいの頃、入居者がぐっと減ってしまって、障がいのある人だけになってしまうという事態が起きました。

田口：住んでいた人たちは自立して生活していたので、その状況でも特に問題は無かったと思うのですが、いこっとのコンセプトとして他に誰もいないというのは良くないという危機感もあり、サポットの会のメンバーが交代で泊まったり・・・という期間が数か月ありました。シェアハウス専門の募集サイト経由で新たに入居した人たちを含めて、私たちがコミュニケーションの仲介のような役割を果たしていたと思います。

南山：インターネットでの募集を通して、もともと住んでいた障がいのある人たちを除いては、ほぼぱれっとのことやいこっとのコンセプトを知らない人たちが入居してきました。当時、月1回開催していたサポットの会の議題では人間関係のトラブルがメインになっていたように思うのですが、実際はどうでしたか？

田口：極端に言えば、15年間の中で人間関係の話が出なかったことは無いんじゃないですかね。でもこの頃は障がいのある人のことではなく、一般の人のトラブルが多かったですね。

高取：始めのころは、障がいのある人たちと生活場面でどう付き合っていくかという学びの意味合いが大きかったですね。障がいのある人たちの新規入居者が滞り始めてからは、社会に向けて、どういこっとの生活に興味を持ってもらうか、広げていくかという議論ももちろんしま

今年の3月をもって、15年間の事業に幕を下ろした「ぱれっとの家 いこっと」（文中：いこっと）。その運営にご尽力いただいた、いこっとサポットの会のメンバーとともにその取り組みを振り返りました。

した。でも当時私たちも、アイデアは出てはなかなか具体的、大々的に動ける状況では無くなっていました。各自生活や仕事も変わっていて多忙になってきていましたから。

谷口：そのころ「シェアハウス」という言葉を一般社会でも良く聞くようになりました。中でも何等かの共通のテーマ性（料理好き、社会起業家、など）を持ったものが出てきました。もちろんこの言葉自体は以前からありましたが、いこっとは従来のシェアハウスと違っていたので、当初はあえて使わないようにしていました。

稲澤：シェアハウスというと「費用的、設備的な負担を減らす目的で共有する」というイメージが前からあり、いこっとはそれとは違っていたので、使わなかったんだと思います。

南山：でもテーマ性というかコンセプトを持ったシェアハウスも登場してきた。

高取：なので、いこっとを説明するのに「シェアハウス」という言葉が一番わかりやすく、イメージしやすくなってきたんでしょうね。それ以降はよく使うようになりました。

南山：一方で障がい者福祉の分野では、大型施設から地域での暮らしへ、さらには企業参入によるチェーン展開を進める動きも出てきて、「グループホーム」の増加が加速しました。「いこっとと一般的なグループホームは何が違うんですか？」と良く聞かれました。

●世話人とリーダー

田口：世話人がいない、というのは大きな違いだったと思います。世話人を置くかどうかの議論もずいぶんしましたね。

相馬：世話人もですが、入居者のリーダーを置くか置かないかでもずいぶん意見を交わしました。結局入居者が頻繁に入れ替わるよう

になってからは最後までリーダーを置くことは出来なかったですが。創立時は何代か続いたんですよね？

稲澤：そうですね。入居者同士の仲を取りもったり、法人本部といこつとをつなげる役割でした。

黒澤：私は、障がいのある人の入居が増えなかったことと、リーダーが不在だったということは直接的にはあまり関係が無いと思っていて、むしろ声をかける側の私たちが「いこつとの暮らしは良いですよ、ぜひどうぞ」と言い切れないようなモヤモヤを持っていたのが要因かと。

南山：そのモヤモヤとは？

黒澤：簡単に言うと、設立当初、コンセプトとして掲げていた「豊かなコミュニケーション」というものが本当に継続して体現できていたのだろうか。サポットの会で出ている入居者間の問題を重く捉えていた私としては、「すごく楽しいところですよ」と言いきれなくなっていたというか。

南山：やはりそこにリーダーが必要だった？

高取：ばれっとと入居者を意識的につなぐ役割という意味では必要だったのかも知れません。

田口：設立当初は、障がいのある人たちのことも知っていて、ばれっととも近い人がリーダーだったので、それが入れ替わって運営が難しくなっていた面もありますね。年月を経るにつれて、たまり場ばれっととの関係も薄くなってしまっ、いこつとのことを知らせる機会が減ってしまっ・・・。

松村：私はたまり場に「自分の価値観の向上」のような魅力を感じてボランティアとして参加していたのですが、実際にいこつとに住んでみて、「障がいのある人とともに暮らすメリット」という点では後から入居してきた（ばれっとを良く知らない）人たちにうまく説明できなかったなと思います。根本の部分ですが、いこつとのことだけではなく、長年の取り組みの中で障がいのある人たちに対する社会の見方が果たして変わったのだろうかという疑問もあります。

南山：今日お話を聞いてきて、創立者である谷口さんが、いこつとを設立して比較的早い段階で「思っていたのとちょっと違うな」と感じていたことがわかりました（※前号参照）。そして

実際に暮らしていた松村さんからも今「ともに暮らすメリットが説明仕切れなかった」というお話がありました。まさに紆余曲折の実践であったことが伺えます。今回いこつとは様々な要因からグループホームへの転換を選択しましたが、15年の取り組みを通じて、今後の彼らの住まい方についてメッセージがあれば。

高取：スタート時は「中軽度の障がいのある人の、グループホームだけではない住まい方の選択肢として」というコンセプトがあったと思います。実際、障がいのある人たちの中には、グループホームの生活には馴染めないという声も少なからずあって、いこつとでの自由な暮らしを選んだ人もいました。今後は法内事業の中で、この「自由な暮らし」がどう保証されていくのか、通過型グループホームの制度による地域移行の流れも出てきている中で、ひとりで暮らすという選択肢を本人が、そして家族がどう受け入れて行くかかと思っています。

相馬：当事者の親から良く聞かれたのは、「見守ってくれる人、世話人とまではいなくてもそういう人がいてくれると安心」という声でした。それは当事者とその家族にとっては大きなことだったと思います。今もその状況は大きく変わってはいません。カン：私は世話人では無いですが、いこつとで一緒に暮らしていて、本当に皆、自分のことはできるだけ自分でやっていて、協力しあって楽しく生活していて素晴らしいと思いました。障がいがあってもなくても同じ「人」として助け合っているというか。

●当り前に

谷口：私はいこつとの事業を発想した時、そんなに大袈裟なことを考えてはいませんでした。メリットがあるとかないとか、そういうことではなく、ごくごく普通に障がいのある人と無い人がともに暮らす、もちろん出来ないこともあるかも知れないし、トラブルもあるかも知れないけれど、暮らしの中でそれを学んだり、助け合ったりしながらつながっていく、そういう雰囲気のも

のをつくりたかったんです。その中で障がいのある人たちが自立して生活ができるようになって行かれればと思っていたんですけどね。この考えは、原点であるたまり場ばれっとの頃から変わらず、すべての事業に共通しているものです。たとえば、同じ屋根の下で暮らす者同士、顔を合わせたら挨拶する、困っている人がいたら手を差し伸べる、そんな当たり前の場所を作りたい。「障がい者だからお世話をしないと」とかではなく。

松村：結婚して家族が出来てみて、そういう「当たり前」を今更ながらに理解した面もあります。障がいのあるなしに関わらず、人間関係作りの基本的なところが変わってきているのかも知れません。

南山：福祉の法制度が整ってきた反面、そういったこと全てが福祉サービス化してきていて、安心安全ではあるけれど、「お互い様」が少なくなったというか、何か文化が変わってきたんじゃないかという声もあります。

田口：それもあると思いますが、私は、コミュニケーションやつながりは大事だし、実践していきたいんだけど、苦手というか、なかなかうまく出来ない、という人も少なくないと思います。自分ではグループのために良かれと思ってとった行動でも、他の人からすると違っていたり。

谷口：そういう「違いを認め合うこと」こそがばれっとの良さなんですけどね。なかなかいこっとの実践は難しかったですね。

田口：でも15年の中で、いこっと同じような「皆で自然に助け合う」というコンセプトの家が少しずつ出来てきた実感はあります。まとまりやすいように少人数にする、などの工夫もされています。

●まとめ

南山：さて、座談会もそろそろ終わりの時間となってきました。最後に皆さんから。

松村：グループホームだけではなく障がいのある人たちの住まい方の選択肢はこれからも必要だという思いはあります。ただ、時代がそこに追いつくにはまだまだ時間がかかりそ

うですね。子育てもそうですが、「皆で支える」というところから逆に離れて、個々が抱え込んでしまっているようにさえ思います。

稲澤：個人的に残念なのは、親の認識があまり変わらなかったのかなということです。本人がいこっとの暮らしを望んでも、親が反対するという例を15年間でいくつか見てきました。もちろん不安なのはわかりますが、知的に障がいのある人の場合は特に親の考えというのが重要な要素になりますので、もっと背中を押せる社会になってほしいと。

田口：15年、本当に色々なことがありましたが、苦しみながらもそれを積み重ねていったということ自体に意味があると思うし、大切にしたいと思います。一般企業を始め、「働く」選択肢はここ数年で本当に増えたと思います。それと同じくらい「住まい方」の選択肢も増えていって欲しいと思います。

高取：今、社会の価値観がいろいろ変わってきていて、働き方改革という言葉も良く聞くようになりました。在宅を含めて、働き方が変わると、時間の使い方が変わり、それに連れて住まい方も変わっていくのではないかと思います。そういう意味では、いこっの取り組みは少し早かったのかも、と思うところもあります。

相馬：今日、メインのテーマにはならなかったですが、制度外で運営されてきたいこっとしては、家賃を含めて、生活にかかる費用が大きな課題でした。これを抑えるためのグループホーム転換の選択であったことも付け加えておきます。制度内になることで、家賃だけ見ても3分の1になることは大きなメリットだと思います。そして今後は、さきほど話にも出ていたように、「えびす・ばれっとホーム」は、制度内のグループホームでありながらも、いこっの想いを引き継ぎ、個々の自由な暮らしを尊重して「距離感を保った見守り」を維持していくこと、同時に関係者皆で力を合わせ、必要な支援が提供され、安心、安全も保証されるという両輪で運営していきたいと思います。

（記録・事務局長 南山達郎）